

[特別講演 I]

島津重豪と薩摩・琉球の博物学

高津 孝

鹿児島大学法文学部

江戸後期、日本における博物学の視線は、北は蝦夷地へ、南は琉球へと向かった。薩摩藩主島津重豪によって主導された薩摩の博物学は南への視線を特徴とする。

薩摩藩主島津重豪（一七四五～一八三三）は、薩摩、大隅、日向の三国を領有し、琉球を間接支配する大名であり、また、江戸という文化的先進地域にあって、将軍家の岳父となり、また、有力大名と姻戚関係を結び薩摩藩の社会的地位を高め、同時に本草学・医学・蘭学など様々な新しい文化を積極的に吸収し、各種博物学書を編纂し出版させた。彼は、江戸後期の薩摩の文化にとって最も重要な人物である。彼は宝暦五年（一七五五）十一歳で家督をついだのち、天明七年（一七八七）隠居し家督を斉宣に譲るまで、三十三年間藩主の地位にあった。また、隠居後も天明七年（一七八七）から寛政三年（一七九一）、文化五年（一八〇八）から文政三年（一八二〇）まで藩政後見として実権を握り、藩に対して多大な影響力を有した。江戸後期、薩摩藩が文化的に一躍注目すべき存在になったのは何よりも島津重豪の功績である。

薩摩藩においては、明和五年（一七六八）頃、九州南部の薩摩藩本土部から琉球王国の八重山諸島まで、南北一千キロにわたる地域の生物調査が行われた。しかし、その調査で得られた標本類を学術的に分析しまとめあげる人材は薩摩藩にはおらず、標本は外部の人材である江戸の田村藍水に下賜され、『琉球産物志』（一七七〇）が著述される。その後、薩摩藩は曾槃という本草学者を召し抱え、薩摩藩としての本格的な博物学的探究を始める。まず手がけられたのが、薩摩藩内の植物が薬としてどのような効能を持つかということ、本草学の本場である中国に質問するという事業である。琉球を通じて行われたこの事業は『質問本草』として天明五年（一七八五）には一応完成する。しかし、琉球が薩摩藩の支配下にありながら、独立国として清朝と朝貢貿易を行っている近世琉球の現状を隠蔽するために、著者は琉球人の呉継志という架空の人物に仮託することになり、さらに、その出版は重豪のひ孫である斉彬の時代、天保八年（一八三七）になった。

その後、薩摩藩は曾槃を中心として本格的な生物百科事典『成形図説』一百巻の編纂に取り組むことになる。残念ながら火災などの不運に見舞われ、原稿は一旦失われ、出版は農業に関連した三十巻に止まった。現在では農書として知られているが、本来の構想は生物全体を対象とした総合的生物百科事典であった。曾槃は優れた本草学者であったが、彼の関心は生物そのものへの探究へと向かわず、その研究姿勢は文献を中心に過去の記述を整理するという考証学であった。これが薩摩博物学の限界をよく示している。島津重豪がシーボルトにも面会し、蘭学に並々ならぬ興味を抱く大名であったにもかかわらず、当時の薩摩藩の学術における蘭学の影響は限定的である。こうした点はひ孫の斉彬の時代になり、西洋学術が科学として産業として薩摩藩に導入されていったのとは大いに異なっていた。

薩摩藩の博物学の今一つの特徴は、鳥類研究である。当時、日本は長崎を通じて国際的な珍獣珍鳥交易の一環をなしていた。長崎を通じて輸入された珍鳥は、幕府や諸大名に買い上げられ、また見世物として各地を巡り、専門の見世物小屋も出現するようになっていた。江戸の諸大名の間では鳥を飼う行為が大名趣味の一部となっており、諸大名の江戸屋敷には様々な鳥が飼育されていた。島津重豪も大名趣味としての鳥飼いを行っており、藩として専門の役人も抱えていた。総合的な養禽書『鳥賞案子』、鳥名辞典『鳥名便覧』、鳥類百科事典『成形図説』鳥ノ部の編纂は、江戸後期の大名趣味としての鳥飼いを背景に薩摩藩で特異な発達を遂げた博物学の分野である。